

自然を語る会

2019年3月16日（土） 10:00～12:00

於：東京ボランティア・市民活動センター

参加者：9名

担当：鈴木善次さん

『レイチェル・カーソン』 ポール・ブルックス著 上遠恵子訳

第21章（最終章）『旅路の終わり』-後半-

3年半にわたって読み継いできた『レイチェル・カーソン（上/下）』ポール・ブルックス著/上遠恵子訳もいよいよ最終回。第21章『旅路の終わり』の後半は、当協会の顧問である鈴木善次さんの進行で、簡潔に纏められた資料を元に参加者の皆様と輪読しながら、カーソンの言葉を一つ一つ噛みしめ、当時のカーソンの思いを想像しながら話し合った。

後半の冒頭は『われらをめぐる海』の出版後間もなくして行われたカーソンの講演内容の結びの言葉が「信念の表明」として紹介されていた。カーソンはその講演において、カーソンが生涯においてかかわってきたことは、地球の美と神秘であり、更には生命よりも大きな神秘であったと述べ、その「かかわり」において不可欠なことは「深く思索すること」「答えることの厳しい質問を自ら発すること」「ある種の哲学に到達すること」であると語った。また、スウェーデンの海洋学者オットー・ペテルソン氏に多大な影響を受けたこと、そしてイギリスの自然作家リチャード・ジェフリーズの文章に心惹かれていたこと等がわかった。

メイン州での最後の夏を友人のドロシー・フリーマンと過ごした時の思い出を綴った手紙には、モナーク蝶がいつきまたいつきと飛び立つ光景に遭遇した時の心情が綴られていた。カーソンはその光景がモナーク蝶の生命の終わりへの旅立ちであることがわかっていてもかかわらず、余りにも素晴らしくて悲しさを覚えなかったのだそうだ。その理由は上遠さんからのご説明でわかった。この時カーソンはすでに癌の病に侵されており、モナーク蝶の飛び立つ姿に自分の運命を重ねたから…であった。渡りを始めたモナーク蝶は同じ場所に戻ってくることはないが、たとえ生命が尽きても次の世代が渡りを引き継いで新しい世代が元の場所に戻ってくるのだそうだ。そう考えるとモナーク蝶の渡りは生命の終わりへの旅立ちであると同時に次の世代に命を紡ぐ象徴のように思える。だからこそカーソンは死を肯定的に受け止めることができたのではないかと思えてならない。

レイチェル・カーソンは、1964年4月14日、メリーランド州・シルバースプリングで56歳の生涯を閉じた。「海辺」の最後の章「永遠なる海」は、レイチェル・カーソンの碑文にふさわしいものであり、カーソン自身がみずからの弔いの場で朗読されることを願っていたが実現しなかったのだそうだ。読書会の最後は上遠さんによる「永遠なる海」の朗読で幕を閉じました。

本書を振り返ると圧倒的な手紙の数に驚かされる。本書の作品目録に掲載されているカーソンの手紙の数は206通にも及ぶ。講演・スピーチの記録も11回分が掲載され、TV番組のCBSレポートや環境破壊に関する上院委員会「リビコフ委員会」におけるレイチェル・

カーソンの声明など、いずれも大変貴重な記録によって編集された本書は、まさにレイチェル・カーソンの伝記であり、カーソンの作家としての魅力だけでなく、人間的な魅力や人生観に触れることができた大変有意義な3年半であった。

(文責：柳澤)